

木材輸出額が増加 38年ぶりの水準に

主事研究員 安藤範親

1 拡大するわが国の木材輸出

2017年の日本の木材輸出額は、326億円と38年ぶりに300億円を超えた(第1図)。1977年に367億円に達して以降減少し、2000年代は100億円を下回る水準で低迷していたが、12年以降増加傾向にある。

ただし、その内訳は過去とは大きく異なる。77年は、輸出額の7割が広葉樹合板、2割強が広葉樹製材であった。合板原料のうち8割弱がナラやセン、カバ等の国産広葉樹材であり、その輸出先は米国が8割強を占めた。当時の日本の木材輸出は広葉樹材が主であり、米国の木材需要の動向に左右されていた。

一方、17年の日本の木材輸出は、輸出額の4割強が針葉樹丸太、2割が針葉樹合板、2割弱が針葉樹製材である。原料の大半がスギやヒノキ等の国産針葉樹材であり、その輸出先は、東アジア(中国、韓国)や東南アジア(フィリピン、ベトナム)である。

17年の木材輸出額は丸太、合板、製材の各品目で16年を上回っている。輸出額増加の要因は、米国の堅調な木材需要に対し、北米や

東南アジア産木材の供給不足感から需給が引き締まり、世界的に丸太の価格が上昇した結果、日本産丸太の価格競争力が増し、主に中国向けの輸出量が増えたことによる。日本からの木材輸出の数量的動向を品目別にみてみよう。

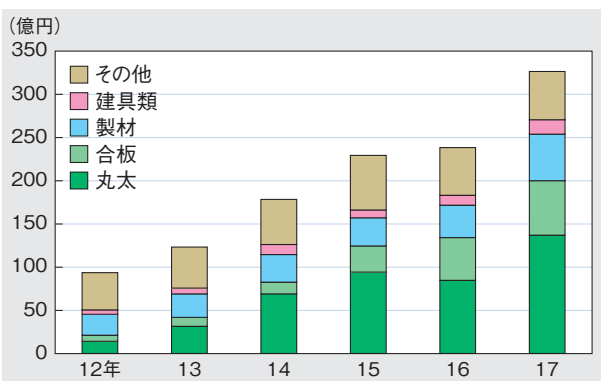
2 中国向けの丸太輸出が拡大

17年の丸太輸出量は97万 m^3 (16年国内丸太生産量2,714万 m^3 の4%)であり、輸出先は中国向けが8割を占め、韓国、台湾と続く(第2図)。輸出用丸太は、99%がスギやヒノキの針葉樹である。

中国へは、主に低品質な丸太が輸出されており、現地では、梱包材やパレットなどの産業資材のほか、建築現場の足場板・敷板などの土木用資材として使われている。一方で、最近はより高品質な丸太を原料とするフローリング等の内装材の用途としても利用され始めており、現地で日本産木材の品質が理解され始めている。

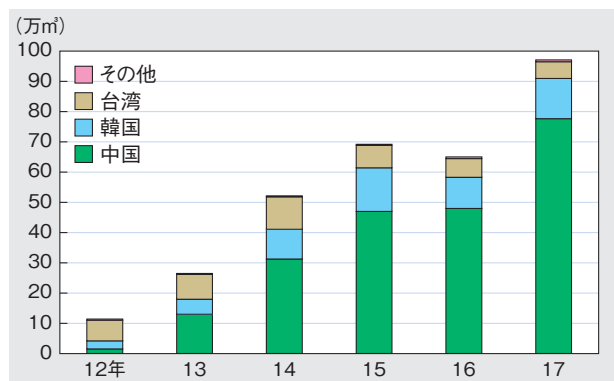
なお、針葉樹の丸太は、スギの生産量が多

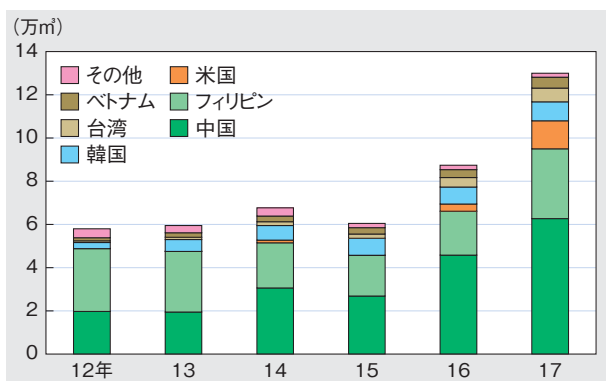
第1図 木材輸出額の推移



資料 財務省「貿易統計」、以下同じ

第2図 丸太輸出量の推移



第3図 製材輸出量の推移

く輸出先国に近い鹿児島、大分、熊本、宮崎など九州からの輸出量が全体の8割を占める。

3 米国向けの製材輸出も急拡大

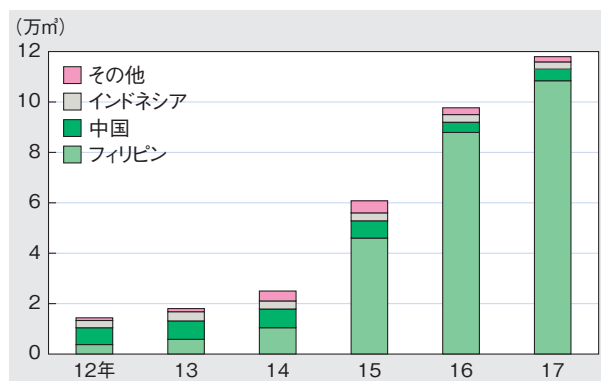
製材輸出量は13万³m³ (17年国内製材生産量929万³m³の1%)であり、輸出先は中国向けが5割弱を占め、フィリピン、米国と続く(第3図)。輸出用製材は、97%が針葉樹である。

中国向けの建築、ひき板(ラミナ)用材が増加しているほか、15年まではほとんどなかった米国向けが17年に1万3千³m³へと急拡大している。米国向けはスギフェンス材としての用途が中心であり、北米でフェンス材に使われるウェスタンレッドシダー(米スギ)の原木供給減少に伴う代替品として、日本のスギが注目されている。米国のフェンス材需要は、同国内の住宅ストックが増加傾向にあることから今後も拡大することが期待される。

なお、中国は日本の建築基準法にあたる「木構造設計規範」の改正を決め、18年8月からは、これまで認められなかった日本産スギ、ヒノキ、カラマツを木造建築物の構造材として利用可能になる。中国への製材輸出の増加が期待される。

4 合板はマレーシアの丸太伐採制限が影響

合板輸出量は12万³m³ (17年国内合板生産量321

第4図 合板輸出量の推移

万³の4%)であり、輸出先はフィリピン向けが9割強を占める(第4図)。輸出用合板に使われる針葉樹材の割合は判明しないが、国内合板の原料のうち82%が国産針葉樹材であることを考えると、輸出用合板にも国産針葉樹材が高い割合で使用されていることが推察される。

フィリピン向けの輸出拡大は、フィリピンに加工工場をもつ日本の大手ハウスメーカーが、マレーシアでの丸太の伐採制限強化により同国産丸太を使った合板の調達が難しくなり、日本製の針葉樹合板へシフトしたことが主な要因である。

5 更なる輸出拡大に期待

近年の日本の木材輸出は増加傾向にある。アジア諸国の発展とともに、アジアでは先進国並みの購買力をもつ高所得層が大幅に増加することが予測されており、木材需要もそれに呼応して拡大することが見込まれている。輸出は、世界の景気動向や為替の変動に左右される恐れがあるものの、アジア諸国の経済動向や木材関連業界の競争力の分析、消費者ニーズの調査をこれまで以上に推進し、更なる輸出拡大に向けた糸口を見いだすことが必要だろう。

(あんど う のりちか)